日本農業研究所研究報告『農業研究』第 36 号（2023 年）p. 275～292

（特別寄稿）

水稲在来品種名から垣間みた
江戸時代の稲作と農民の姿

西　尾　敏　彦

目　次

１．はじめに
２．対象にした史料と採録品種数、その地域別ならびに早～晩・糯別分布
　１）品種名を採録した史料と品種名数
　２）採録した品種名の地域分布と早晩生・糯の別
３．品種名のさまざま、そこからみえてきたもの
　１）色にかかわる品種名
　２）「髭・ひげ」「毛」「芒・のぎ・のげ」と「法師」「坊主」
　３）地方名・領国名など地名に由来する品種名
　４）「撰り出し」「見付け」「見出し」「掘り出し」、そして〈人の名〉品種
　５）「こぼれ」と「太唐」「唐法師」
　６）その他、諸史料に多くみられた品種名
４．おわりに

１．はじめに

江戸時代の稲の品種名はおもしろい。「五ッ九」は５×９＝45 日、「やようか（八八日）」（いずれも『農稼録』[II]）は８×８＝64 日で稔る極早生、「トッパ」（『農要録』[II]）は 10×８＝80 日で稔る早生種とか。（以下、史料の肩のⅠ・Ⅱ･Ⅲは、当該史料の著者・成立年などを記す文末付表１・２・３に対応。史料名の長いもの適宜省略した）

多収をのぞむ農民らしい命名が「万石」「庭溜り」（『産物帳』[I]）「米の山」（『佐賀県坪刈帳』[III]）。年貢の完納をのぞむ「皆済（かいせい・かいさい」や「借銭なし」（『産別帳：佐渡・備前』[I]）。「どさり見せ」（『雑事紛冗解』[III]）も

農民らしい命名である。「軍(いくさ)戻り」(『雑事紛冗解』Ⅲ)は戦(いくさ)の帰り道で、「どろぼう」(『産物帳：出雲』Ⅰ)はどこかの田んぼから拝借してきた品種だったのだろう。「三年黙(だまり)」(『農稼録』Ⅱ)は３年間黙った後、周囲に広めたということだろうか。

「ケチヂミ」(『両国本草』Ⅲ)は「吝・地味」でなくて「毛縮み」で、「ゆっくり」(『伊勢錦』Ⅱ)は晩生のようだが、「ヤリクリ」「ケチリン」(『両国本草』Ⅲ)はどんな稲だったのだろう。

本稿は、著者が目を通すことができた多くの江戸時代の史料について、そこに記された稲の品種名を可能な限り多数採録し、これを読み解くことによって、江戸時代の稲作と、これを植え継いできた農民たちの心と姿に少しでも近づき、それを窺い知ろうとしたものである。

もちろん多数史料の上にある品種名をたどるのである。同名異種も多く、異種同名も多いだろう。時代の移り変わりの中で改名された品種も多いに違いない。そのことを承知で試みた、いかにも無謀な作業である。だがその作業の中から、少しでもなにかがみえてくればさいわいである。

２．対象とした史料と採録品種数、その地域別、早～晩・糯別分布

１）品種名を採録した史料と品種名数：

最初に本研究で稲の品種名を採録した史料と、そこに採録された品種名数についての概略を述べておきたい（詳細は文末の付表１～３参照)。

史料群Ⅰ.『享保・元文諸国産物帳産別帳』(盛永俊太郎・安田健編著『江戸時代中期における諸藩の農作物』日本農業研究所）収録の 42 国・領・郡）の史料[注1)]　採録できた品種名数：4,100

史料群Ⅱ. 農文協刊：『日本農書全集農書』 全 70 巻中の品種名が記録されていた 40 書[注2)]　採録できた品種名数：1,077

史料群Ⅲ. その他、著者が目を通すことができた『地方(じがた)書』『坪刈帳』、その他の史料など 26 書[注3)]。　採録できた品種名数：1,213

いずれも江戸時代の中期（天和～安永：1681～1780）・後期（天明～慶応：1781～1867）の史料だが、全体としてかなり中期に偏しているので、ここでは中期・後期を分けることなく合わせて検討に供した。

品種名採録の基準：

品種名の採録は、各史料とも著者の目にとまったすべての品種名を採録した。もちろん異なる時代に異なる土地で書かれた史料である。同名異種もあれば、異種同名も多いだろうが、とくに意識することなく採録した。

ただし、同じ領国内・同じ史料内で、同じ品種名が複数町村に重複して記載されている場合は、一郡一品種と定め、並記しなかった。また「あぜこし」と「あせこし」「畦越し」、「あらき」と「荒木」など、あきらかに同一品種と思われものについてもひとつに絞った。

採録に当たっては、読み落としのないように注意したつもりであるが、なお記載漏れ・重複記載が多くあったであろうことは否定できない。そのことをおことわりしたうえで、以下、論議を進めていきたい。

なお、品種名はエクセルに採録し、その数の解析にはフィルター機能を活用した。

２）採録した品種名の地域分布と早晩生・糯の別：

考察に先立ち、まず対象にした 6000 に余る品種名について、その地域分布と早・晩生、糯の割合について述べておきたい。

表１に、各史料から採録した粳品種の早晩生品種・糯品種の採録数を、その史料が成立した地域：東北、北陸、中部（甲斐・信濃・飛騨）、関東、東海、近畿、中国、四国および九州の９地区に分けて示した。

採録品種名の地域分布：

おことわりしておかなければならないのは、３種の史料群間で、また地域によって、採録数に大きな差があることである。採録数の多い北陸・東海・九州と、少ない中部・近畿・四国など、閲覧できた史料が地域によってかなり差がある。やむを得ないことだが、以後の考察はこれが前提にあることも記しておきたい。

表１　江戸時代各史料から採録された品種名の地域別、早・中・晩・糯性別数

史料名	早晩	東北	北陸	中部	関東	東海	近畿	中国	四国	九州	全国	総計
史料Ⅰ	採録数	337	769	192	293	949	166	690	133	571		4100
	早生	107	213	56	76	248	45	129	37	126		1037
	中生	84	247	57	101	297	45	214	45	175		1265
	晩生	128	319	56	96	315	50	209	21	129		1323
	糯	106	175	47	60	207	39	171	27	109		941
史料Ⅱ	採録数	269	290	11	60	89	34	66	171	87		1077
	早生	71	68		9	13	8	16	35	18		238
	中生	30	58		15	10	6	6	36	8		169
	晩生	27	87	1	10	16	11	2	36	9		199
	糯	43	45		10	5	1	6	31	8		149
史料Ⅲ	採録数	98	54	181	38	37	104	241	32	368	60	1213
	早生	28	1	16	1	1	3	78	8	57	4	197
	中生	32	3		3			80	6	28	5	157
	晩生	20		6			1	73	11	31	2	144
	糯	20	9	25	1	6	8	34	8	64	13	188

注）史料Ⅰ：盛永・安田(1986)「江戸時代中期における諸藩の農作物」日本農業研究所
史料Ⅱ：農文協刊『日本農書全集』第 1～70 巻中の品種名を記載した史料
史料Ⅲ：その他著者が閲覧した『地方書』『坪刈帳』など

採録品種名の早晩生、粳・糯の別：

表中、史料群Ⅰの『産別帳』については、すべての品種について、早・中・晩が記載されていて類別できたが、Ⅱ・Ⅲの史料群については、一部に早生が特記されている以外は品種名のみの記述が多く、早・中・晩の類別ができたとは言い難い。ただ史料群Ⅰについてみると、晩生がもっとも多く、以下中・早・糯の順に漸減しているが、あまり大きな差は見当たらず、いずれもかなり多く存在していたことが推定できた。

この時代、既に早生だけでなく、中・晩生、糯も多く出廻り、農民にとって選択の巾が広くなっていた。史料群Ⅰの各地にみられる早・中・晩、糯それぞれの品種名の多さは、人びとが収量確保にいかに知恵を絞っていたかを示すものだろう。

３．品種名のさまざま、そこからみえてきたもの

１）色にかかわる品種名

早生・晩生の違いが人びとに品種を認識させた最初なら、稲体の色の違いは人びとに品種の多様性を認識させるきっかけになったのではないだろうか。

表２　「色」に関係する品種名の史料別・地域別分布

色	史料	東北	北陸	中部	関東	東海	近畿	中国	四国	九州	全国	計
あ　お（青）	Ⅰ	5	4	1	5	9		6	1	2		33
	Ⅱ	3							2			5
	Ⅲ	4		1				2		3		10
あ　か（赤）	Ⅰ	16	46	13	11	39	5	27	5	31		193
	Ⅱ	15	10	2	3	4	1	4	10	3		52
	Ⅲ	4	3	3	1		2	7	2	8	2	32
しろ・しら（白）	Ⅰ	27	56	21	29	102	7	45	9	40		336
	Ⅱ	21	27	4	2	3	2	2	9	4		74
	Ⅲ	11	4	12	2	4	5	16	1	22	8	85
く　ろ（黒）	Ⅰ	8	41	9	11	36	4	28	8	11		156
	Ⅱ	10	12	1			1		4	1		29
	Ⅲ	5	1	7	2			7	2	8		32

注）史料Ⅰ：盛永・安田(1986)「江戸時代中期における諸藩の農作物」日本農業研究所
史料Ⅱ：農文協刊『日本農書全集』第１～70 巻中の品種名を記載した史料
史料Ⅲ：その他著者が閲覧した『地方書』『坪刈帳』など

各史料から採録されたおびただしい品種名をみていて、まず気がつくのは「青麻」「赤三助」「白しね」「白葉」「黒弘法」など、〈色〉にかかわる品種名の多いことである。芒や籾、玄米・葉鞘などの色の変化に応じた命名だろうが、この時代、なお有色稲が広く栽培されていたことがわかる。

表２に〈色〉に関する品種名をもつ品種の採録数を示した。いずれの地域でも〈白・しろ・しら〉がつく品種がもっとも多く、ついで〈赤・あか〉〈黒・くろ〉〈青・あお〉の順であった。

興味深いのは、色に関する品種名、とくに〈白〉と〈赤〉が東北から北陸・中部地方など北日本に多いことである。津軽の『耕作噺』[II]には〈根の津軽米は赤米に候よし古往の伝へなり〉とある。もともとこの地方の稲には赤米

が多かったことが、逆に白い米への関心を高めたに違いない。

2）「髭・ひげ」「毛」「芒・のぎ・のげ」と「法師」「坊主」

〈色〉とともにめだつ稲の外観的特長は〈芒〉の有無である。採録した品種名をみても芒の有無を示す品種名は多い。表３に、芒の有無に関係する〈髭・ひげ〉〈毛・け〉〈芒・禾・のぎ・のげ〉の字を含む品種名と、無芒種を示す〈法師・ほうし〉〈坊主・ぼうず〉〈弘法・こうぼう〉を含む品種名の採録数を示した[注4)]。通覧して全国いずれの地域でも、芒の有無に関係する品種名が広く存在したこと、また農民が品種を選ぶ際の選定基準のかなり上位に〈芒の有無〉があったことがわかる。

表３　芒の有無にかかわる品種名の史料別・地域別分布

芒の有無		東北	北陸	中部	関東	東海	近畿	中国	四国	九州	計
ひげ・ひけ（髭）	Ⅰ	6	1	2	6	10	5	2	1	8	41
	Ⅱ	4				1			1	1	7
	Ⅲ	3	1	2	2	2				2	12
け（毛）	Ⅰ		11	1	2	9	1	6	1	6	37
	Ⅱ		8			1	1	1	1		12
	Ⅲ		1	1	1		1	3			7
のぎ・のげ（芒）	Ⅰ				1					4	5
	Ⅱ	2									2
	Ⅲ		1							3	4
ほうし・ぼうし（法師）	Ⅰ	2	2	2	1	4		9	3	3	26
	Ⅱ		2						4		6
	Ⅲ			1				8			9
ぼうず（坊主）	Ⅰ	4	28			2	2	1		1	38
	Ⅱ	2	14			1	3	3			23
	Ⅲ					2				11	13
こうぼう（弘法）	Ⅰ							7	2	2	11
	Ⅱ										0
	Ⅲ		1				8		1		10

注）史料Ⅰ：盛永・安田（1986 ）「江戸時代中期における諸藩の農作物」日本農業研究所
史料Ⅱ：農文協刊『日本農書全集』第1～70巻中の品種名を記載した史料
史料Ⅲ：その他著者が閲覧した『地方書』『坪刈帳』など

「法師子」など無芒の稲の存在は、すでに平安後期の『散木奇歌集』からもみられる[注5)]が、江戸時代にはさらに普及していたようだ。『産物帳：近江高島郡』[I]には、同地で作付けされていた９品種のうちに無芒が６品種、有芒品種が３品種あったことが記されている。武蔵の『耕作仕様書』[II]には 25 品種のうち、有芒 10 品種が、無芒 14 品種（残りの１品種「こぼれ」には表示がない）とある。この時代、既に有芒・無芒が相半ばしていたのだろう。

明治になると、稲の無芒化が急速に進むが、江戸時代の農民は芒の有無に意味を認めていたようで、『農業自得附録』[II]には「の毛稲ハ風にいたまずこぼれも少し。冷気のさわりも少し。態々考へて益き多き方を作るべき也」とある。逆に『伝法記』[III]には〈毛稲多升付なし、法師稲、多升付有り〉と記されている。収量となると、果たしてどうだったろう。

３）地方名・領国名など地名に由来する品種名

〈色〉や〈芒〉関連の品種名も多いが、〈地名〉に関係する品種名も多い。表４に、北国・四国などの地方名と陸奥・京・薩摩など領国名レベルの品種名の中から、採録数の多かった５品種名の史料別・地域別数を示した。

表４　地名を含む品種名の史料別・地域別分布

地名	史料	東北	北陸	中部	関東	東海	近畿	中国	四国	九州	全国	計
ほっこく	Ⅰ	4	2	2	11	7	2	26	5	6		65
・きたぐに	Ⅱ	6	1				1	1	1	1		11
（北国）	Ⅲ			3				7		1	2	13
きょう（京）	Ⅰ	3	16	1	3	13	2	9	2	15		64
	Ⅱ	7	5		2	1	2	2	4	1		24
	Ⅲ	1		2				3	1	5	2	14
いせ（伊勢）	Ⅰ		12	3	5	18	6	8	1	7		59
	Ⅱ		2	6	1	1			2	2	2	16
	Ⅲ			6	2		2	2		10	2	24
ぶんご（豊後）	Ⅰ	6	2	1	3	1		3		2		18
	Ⅱ	20	3		1			2		3		27
	Ⅲ	3						2		5		8
かが（加賀）	Ⅰ	1	7	3		4	2	5		4		26
	Ⅱ		3		1	1			1			6
	Ⅲ			1				1	1	2		5

注）史料Ⅰ：盛永・安田(1986)「江戸時代中期における諸藩の農作物」日本農業研究所
史料Ⅱ：農文協刊『日本農書全集』第１～70 巻中の品種名を記載した史料
史料Ⅲ：その他著者が閲覧した『地方書』『坪刈帳』など

〈地名〉のついた品種名のなかで、とくに多かったのは「北国・ほっこく」である。北国は冷涼な土地でも育つ稲の姿を連想させる。いつ襲ってくるかわからない冷害の恐怖に常にさらされていた当時の人にとって、「北国」という耐冷性を想起させる名は魅力的であったのに違いない。

「北国」に次いで多かったのは「京女郎」などの〈京〉、「伊勢錦」などの〈伊勢〉、それに〈豊後〉〈加賀〉のつく品種名である。『農稼録』Ⅱには〈旅へ行きし道すがら、よかるべき稲種子を所の農夫に乞求め、二穂三穂づつ持ち帰り〉とある。他所の地によく穫れる稲があると聞けば、行って貰い受け、つくってみる。〈地名〉品種が多いのは、そうした土地に旅する農民が多くいたことを示すものであろう。とくに〈京〉〈伊勢〉の多いのは〈京見物〉〈伊勢詣で〉が連想されて興味深い。

興味深いのはもうひとつ、「豊後・ぶんご」という九州の地名の品種名が東北地方に偏って多いことである。『羽陽秋北～』Ⅱには〈此ノ稲豊後ニテハ国稲ト称スルナリ。往古当領ノ者、此ノ豊後ノ国稲ト云稲ノ稲穀ヲ持チ来テ其ノ本名ヲ呼バズ、国名ヲ稲ノ名ニ呼テ豊後稲ト云ナリ〉とある。遙かなる稲作先進地へのあこがれが、東北に「豊後」を広めたのだろうか。

４）「撰り出し」「見付け」「見出し」「掘り出し」、そして〈人の名〉品種

ただ他所の稲を持ってきて植えるだけでなく、自ら新しい品種をつくってみようと思う農民が生まれたのも、江戸時代稲作の特長である。「撰り・より出し」「選」「見付け」「見出し」「掘り出し」などの品種名がそれで、農民自らが変わり穂を〈選り分け〉、〈見付け〉出して、新品種を育成したことをうかがわせる。

表５の上段に、「め黒えり出し」「十郎見付」など、原品種や育成者名を冠した〈選り出し〉や〈見付け〉のつく品種名の採録数を示した。それほど多い数とはいえないが、全国に広く分布していることが理解できよう。

「撰り」「見付け」「見出し」などのつく品種はそれほど多くないが、これに追加したいのは、「撰り」も「見付け」「見出し」もつかないが、「源六」（『産別帳：播磨』Ⅰ）「八右衛門早稲」（『会津農書』Ⅱ）「太郎兵衛もち」（『耕稼春秋』Ⅱなど、〈人の名〉だけの品種名である。『農稼録』Ⅱには「喜八赤」

という品種について〈喜八という人のよりし也〉とある。こうした〈人の名〉だけの品種もまた、多くは農民が〈撰り〉〈見付け〉出した品種に相違ない。

表５　「撰り・選・見付け」と「人の名」を含む品種名数の史料別・地域別品種数分布

		東北	北陸	中部	関東	東海	近畿	中国	四国	九州	計
えり・いり	Ⅰ		2	4		8		5	1	1	21
（撰り）	Ⅱ	2							1	1	4
	Ⅲ		5	2				1		4	12
より	Ⅰ		4	1		7	2	1		3	18
（選り）	Ⅱ		2			2					4
	Ⅲ						8				8
せん	Ⅰ		2			1		1		2	6
（撰・選）	Ⅱ										
	Ⅲ								1	2	3
みつけ	Ⅰ			2				2		5	9
（見付け）	Ⅱ									1	1
	Ⅲ			6				1			7
みだし・みたし	Ⅰ		6	1		1					8
（見出し）	Ⅱ		1								1
	Ⅲ			4							4
ほりだし	Ⅰ		1	2		2		5		1	11
（掘り出し）	Ⅱ										
	Ⅲ			1							1
えもん	Ⅰ	3	13	1			1	2		1	21
（右衛門）	Ⅱ	1	2					1	2		6
	Ⅲ		1	4						1	6
べい	Ⅰ	1	6			1		3		3	14
（兵衛）	Ⅱ		1						1		2
	Ⅲ			1						2	3
すけ	Ⅰ	17	9		1	1		1	3	2	34
（助）	Ⅱ	11	4			1			1		17
	Ⅲ	2	2					3		1	8
ろう	Ⅰ	3	22	6	1	8	4	15	6	14	79
（郎）	Ⅱ		18		1		1			1	21
	Ⅲ	2					2	7		11	22

注）史料Ⅰ：盛永・安田(1986)「江戸時代中期における諸藩の農作物」日本農業研究所
史料Ⅱ：農文協刊『日本農書全集』第１～70 巻中の品種名を記載した史料
史料Ⅲ：その他著者が閲覧した『地方書』『坪刈帳』など

表５の２重線以下は〈衛門〉〈兵衛〉〈助〉〈郎〉がつく品種名の数である。残念ながら、これら〈人の名〉品種を全史料に当たって選別するのはきわめて煩雑で難しい。そこで便法として、〈人の名〉に関係が深い上記４ワードに着目して〈人の名〉品種らしき品種名を選出した結果がこれである。選出の際、

とくに〈助〉〈郎〉については、「三助」「京四郎」(「京しろ」からのダジャレ)など、あきらかに〈人の名〉外と思われるものは除いたが、その範囲の調査でも多くの〈人の名〉品種が認められた。

人が代わり時を経るなかで、選抜者も原品種名も消え、単に「撰り」「見付け」「見出し」とだけ呼ばれるようになった品種も多いが、逆に原品種名や「撰り」「見付け」の文字が消え、〈人の名〉だけが残った品種名も多いようだ。江戸時代の農民が品種の重要性を認識し、いかに新しい品種の選抜に熱心であったか、またそれをいかに多くの仲間が期待し、かつ支えていたか、を伝えるものである。

5)「こぼれ」と「大唐」「唐法師」

以上、各史料の品種名を通覧していて、もうひとつ気になるのが、ときに連書された品種名とは別立てでつけ加えられた「大唐」「唐法師」などインディカ種の品種名である。いずれも大陸由来の脱粒性の高い品種で、11 世紀(平安末)から 14 世紀(室町前期)にかけて渡来したといわれる[1)]。

表6 「こぼれ」「たいとう」「とうほうし」を含む品種名の史料別・地域別分布

		東北	北陸	中部	関東	東海	近畿	中国	四国	九州	不明	計
こぼれ	Ⅰ		3	1	5	27	2	5				43
	Ⅱ		4		2	1						7
	Ⅲ		1	3	2	1	2	1	1	3	2	16
たいとう・たいと(大唐)	Ⅰ		11	1	2	3		10	4	5		36
	Ⅱ	1	7			1			8	1		18
	Ⅲ							1		8		9
とうほうし・とうぼし(唐法師)	Ⅰ	1	1			2			1	5		10
	Ⅱ	1	2		2	1			1			7
	Ⅲ			1	1	1			1		1	5

注)史料Ⅰ:盛永・安田(1986)「江戸時代中期における諸藩の農作物」日本農業研究所
史料Ⅱ:農文協刊『日本農書全集』第1～70巻中の品種名を記載した史料
史料Ⅲ:その他著者が閲覧できた『地方書』『坪刈帳』など(付表参照)

表6に、これらインディカ品種名に、やはり脱粒性の高い「こぼれ」[注6)]も加えた名品種の史料別・地域別採録数を示した。「こぼれ」は東海で、「大唐」は北陸・中国・四国で、「唐法師」は九州でやや多くみえるが、いずれも全国

で広く栽培されていたことがわかる。

『北越新発田～』[II]には「こぼれ」について、〈田植後一両日過、畦際稲四株の中へ壱株宛植付申候…此稲小作のもの早く取上ケ糧食に作候〉。また『清良記』[II]には「大唐」８品種について〈白地を嫌わす、農人の食として上々の稲也〉とある。多少味が悪くも脱粒性易でも、不良環境に強く年貢対象外のこれらの米は、自家用米としてひそかに親から子へと植え継がれ、農民とくに貧農を支える柱となったのに違いない。

６）その他、諸史料に多くみられた品種名

表７に、以上の品種名以外で、史料に多く登場した品種名を多い順に表記した。

表７　採録数の多い品種名の史料別・地域別採録数

品種名	史料	東北	北陸	中部	関東	東海	近畿	中国	四国	九州	全国	計
やろく（弥六・弥碌）	Ⅰ		41		2	5	16			30		94
	Ⅱ	1	12		2			3	16	1		35
	Ⅲ	1		6	4	1		1	1	24	5	43
めぐろ・めくろ（目黒・芽黒）	Ⅰ	5	17	4	2	4	1	7	2	8		50
	Ⅱ		6			1	1	1	1	1		11
	Ⅲ	3		5				2	1	6		17
ちこ・ちっこ（小児）	Ⅰ	1	2			32	1	7				43
	Ⅱ		1						1			2
	Ⅲ							2		1	2	5
あかもち（赤餅）	Ⅰ	3	7	2	3	1	1	6	1			24
	Ⅱ	4	1		1	1		1	4			17
	Ⅲ	1	1	1			1	1	1		1	7
しろわせ・しらわせ（白早生）	Ⅰ	2	5	4	1	5	2	3	1	5		28
	Ⅱ	4	3		1			2	2	1		13
	Ⅲ	1						1		2	1	5

注）史料Ⅰ：盛永・安田(1986)「江戸時代中期における諸藩の農作物」日本農業研究所
史料Ⅱ：農文協刊『日本農書全集』第１～70 巻中の品種名を記載した史料
史料Ⅲ：その他著者が閲覧できた『地方書』『坪刈帳』など（付表参照）

「弥六・やろく」：

『清良記』[II]には「野鹿」、『雑事紛冗解』[III]では「弥勒」の字が当てられているが、とび抜けて多く史料に登場した品種名である。

東北を除く全国各地で広く作られていて、土佐の農書『続物紛』Ⅱには「はややろく」「おきやろく」「ありまやろく」「小やろく」「大やろく」「筑前やろく」「やろく糯」「もろきやろく」と８種の「やろく」が紹介されている。総じて中・晩生が多いが、「弥六もち」など糯も多くあった。

盛永・安田[2)]は、『産物帳』Ⅰにみられる「やろく」名の 12 品種がすべてが無芒であったとして「あるいは無芒、坊主稲の意味かもしれない」と述べているが、同書の筑前国の項には「毛弥六」がある。

嵐[3)]は「優良品種に対する公認レッテルでは」と述べている。確かに『日向纂紀』Ⅲをみると、武州荒川から持ち帰った多収の「荒川稲」という稲が香米の悪臭のため栽培禁止になりかけたが、名を「清武彌六」と改めたことで広く普及した話という話が伝えられている[注7)]。「弥六」名品種が高い評価を受けていたことを示すものである。

「目黒・めぐろ」：

中世から続く中国地方の田植え唄[注8)]にも登場する品種名で、「やろく」に次いで東北から九州まで多くの史料でみられる。「芽黒」（『北越新発田～』Ⅱ）と記したものもあり、『農稼録』Ⅱには〈籾の芽少し黒し〉と記されている。芒が黒ずんでいたのだろう。「糯」とする史料が多い。

「小児・ちこ・ちっこ」：

とくに東海・中国地方に偏って多くみられた。『地方竹馬集』Ⅲには〈「弥六」「ちこ」等の様に毛これ無く升目多き稲を作るをよし〉とある。この品種もまた「弥六」同様に多収であったのだろう。

「赤餅・あかもち」：

同名異種の多そうな品種名だが、東北・北陸地方と、それにつづく中国山陰地方に多かった。『続地方落穂集』Ⅲには〈毛少なく、弥六より穀少、山中に作る〉とある。種子島の宝満神社、対馬の多久頭魂神社などでは〈赤い米〉が神事に重用されているが、赤色が餅としてよろこばれたのだろう。別に「赤盆もち」（『産別帳：越中』Ⅰ）などという品種もある。

「白早稲・白和世・しろわせ」：

9 世紀前半の福島県矢玉遺跡からもこの品種名の木簡が出土しているが、古くから名の通った品種名である[4)]。同名異種も多いが、東北から九州まで、各

地の史料に登場する。武蔵の『耕作仕様書』[II]には〈風味中。中手。毛白く長し。干田に作るへし〉とあるが、作りやすい標準的な品種であったのに違いない。

なお、このほかの各史料に多くみられた品種名に「白葉・しろは・しらは」（史料Ⅰ：42・Ⅲ：２、以下各同じ）「白稲・しろいね・しらしね」（史料Ⅰ：19・Ⅱ：８・Ⅲ：８、以下同じ）、「赤稲・あかいね・あかしね」（15・６・４）、「荒木・あらき」（21・４・３）、「苅子・かるこ」（29・３・３）などがあった。

４．おわりに

わが国の稲作の歴史で、はじめて「品種名」が認められたのは、奈良時代で、正倉院文書の啓状に「稲依子」「越特子」という記述があったのが、最初であるという[5)]。室町時代になると、稲にも早生・中生・晩生がみられるようになるが、それが多く出まわるようになったのは江戸時代になってからであった。

古島[6)]は、江戸時代の品種について〈発見や伝来の経緯にもとづくと思われる品種名があらわれるのは、室町期にはみられない特色である〉と述べている。確かにこの時代、とくに江戸中・後期になると、「赤稲」「白しね」など〈色〉に関係する〈色〉品種や、芒の有無を示す〈ひげ：坊主〉品種だけでなく、「北国」「伊勢」など、導入元を示すと思われる〈地名〉品種や、「撰り」「見付け」など、選抜の足跡を残す〈撰り・見付け〉品種、さらに〈人の名〉を冠した品種など、品種名にもそれにかかわった農民の姿が見え隠れするようになった。

本報告は、江戸時代の史料から拾いあげた重複を含めた 6000 余の品種名を通覧することによって、稲作に命をかけた当時の農民が、品種になにを見、なにを期待していたか、そしてまた品種づくりに、いかに深く関与していたかを明らかにしようとしたものである。そこに当時の農民の姿を垣間見ることができると考えたからである。

１）品種名を通覧して、まず目につくのは「赤稲」「白しね」「黒稲」など〈色〉に関する品種名や、「白毛」「黒髭」「法師」「坊主」など、有芒・無芒

を暗示させる〈ひげ：坊主〉品種が多いことである。〈色〉の違いや〈芒の有無〉を知ったことが、人が品種を認識した最初の第一歩であったのだろう。

２）品種づくりに、農民が関与するようになった最初の兆しは〈地名〉を冠した品種名の出現である。

「北国」「京」「伊勢」「豊後」など。江戸時代、人びとはより優れた稲を求めて他国にまで目を配り、また旅の道すがら〈よりよき品種〉を求め、持ち帰ったのだろう。

３）農民の品種づくりの第２段階は「選り」「見付け」「掘り出し」などが付された品種名の出現である。この時代になると、進んで〈変わり穂〉の選抜・撰り出しに挑む農家が多くなった。〈人の名〉品種名の多くは、その労を称える意味ももっていたのに違いない。

４）最後に忘れてならないのは、「こぼれ」「大唐」「唐法師」などの品種名である。脱粒しやすく、米質が悪いため、年貢米からは除かれたが、不良環境に堪え、早期収穫が可能であったため、貧しい農民層には自家用米として歓迎された。品種名数だけを追う本調査の宿命で、植付面積までは把握できないが、かなりの量、栽培されていたに違いない。とくに「こぼれ」は大正時代まで植え継がれているが、これら品種の存在こそが、江戸時代稲作の陰の柱であったのに相違ない。

ともあれ、諸史料を通覧して、記載されている品種名の多さには驚かされた。『耕作噺』Ⅱには〈種物も色々あり〉とした上で〈凡そ種物を撰む事農家の根元也〉と記している。伊那谷の『前島家日誌』Ⅲには、宝暦～文化の間約１世紀に 19 品種が植え継がれているが[7)]、人びとは早・中・晩、各多様な品種を用意して災害に備えていたのであろう。

明治になって、農商務省農事試験場が本格的な品種改良に取り組むべく全国から在来品種を集めたとき、4000 種もの品種が集まったという[8)]。これこそ江戸農民の血と汗が築きあげた知的財産あっての成果であり、今日わが国が世界に誇る多収・良質品種は、この江戸時代農民の智（血）の遺産があって、はじめて達成できたものであることを、最後に明記しておきたい。

注

注１）『享保・元文諸国産物帳』は、享保 20 年（1735）から元文３～４年（1738～39）の間、当時幕府に仕えていた本草学者丹羽正伯の企画の下に編集された天産物の調査記録。本書、盛永・安田編『江戸時代中期における諸藩の農作物―享保・元文諸国産物帳から―』は、その後散逸していたこの貴重な資料を編著者の 1 人安田健氏が盛永俊太郎氏の支援の下、長年月をかけ収集したもの。1986 年に日本農業研究所の委託事業として刊行された。

注２）農文協刊（1980～97）『日本農書全集』: 全 70 巻のうち、著者が水稲品種名を認めた巻。付表２には原則として３品種以上採録した巻を表示。

注３）『地方（じかた）書』とは、江戸時代に年貢取り立てなどを担当した地方役人が参考とした地方制度・慣例などを記した書。当時栽培されていた稲品種の特性に触れた記述も多い。『坪刈帳』『種子帳』は、その地方調査に対応するため、農民側が用意したもの。

注４）エクセルのシュウト機能では「ひげ」と検索すると「ひげあり」「ひげなし」、「毛」の検索で「毛有り」「毛無し」の両方がシュウトされる。ここでは敢えて「あり・なし」を識別せず、ただ芒の有無に関係する品種名として考察に供した。

注５）平安後期の『散木奇歌集』(1128 年ころ)には、

〈覚束な／たが**袖のこ**にひき重ね／**ほうしこ**のいね／かへし初けむ〉

という歌がある。

注６）嵐（1974）『赤米考』７頁は「こぼれ」について、この品種が印度型稲であるとする説を疑問視し、〈大部分がむしろ日本型稲に所属している〉としているが、当時の農民が「こぼれ」と「大唐」「唐法師」などを識別していたとは考えにくい。ここはジャポニカ・インディカが混在していたとみるべきと考え、考察に供した。

注７）『日向纂記』Ⅲ(1971)に、日向藩が寛保２年(1742)に幕府の武州荒川普請手伝いを命ぜられた際に持ち帰った稲との記述がある。多収で「荒川稲」と呼ばれ、広く普及したが、悪臭のため郡代が栽培を禁止した。そこで人びとは名を「清武弥六」と改め、密かに栽培・普及したとある。

注８）室町後期～安土・桃山時代からつづく中国地方の田植唄を記した『田植草紙』にも

〈きのふ京からくだりたる／**めくろ**のいねはな……〉

と唄われている。　高野辰之編（1942）『日本歌謡集成巻五』209 頁、東京堂

引用文献

１） 嵐　嘉一（1974）『赤米考』265 頁、雄山閣

２） 盛永俊太郎・安田健編（1986）『江戸時代中期における諸藩の農作物－享保・元文諸国産物帳から－』266 頁、日本農業研究所

３） 古島敏雄（1975）『日本農業技術史』172 頁、古島敏雄著作集６、東京大学出版会

４） 平川　南（2008）「米国家の始まり」『日本の原像』74 頁、小学館

５） 安藤広太郎（1959)『日本古代稲作史雑考（第２版)』163 頁、地球出版
６） 古島敏雄(1956)『日本農業史』253 頁、岩波書店
７） 前掲（古島『日本農業史』）583 頁
８） 松尾孝嶺（1948)「国立農事試験場に於ける稲の品種改良 50 年史」『農事試験場研究報告』63 号５頁、農商務省農事試験場

付表１　史料群Ⅰ『享保･元文諸国産物帳』各藩とその採録品種名数

領国名	品種数
陸奥・盛岡領	128
出羽・庄内領	40
出羽・米沢領	77
陸奥・三春領	95
佐渡国	64
越後・滝谷村	31
越中国	173
能登国	110
加賀国	198
越前・福井領	194
信濃・筑摩郡	98
信濃・高遠領	76
飛騨国	15
常陸・水戸領	228
下野	23
伊豆国	132
駿河・御厨村々	26
遠江・懸河領	75
参河・加茂郡	14
美濃国	329
尾張国	374
近江･高島・蒲生郡	21
摂津・武庫郡	14
和泉・岸和田領	50
紀伊国	72
隠岐国	24
出雲国	175
播磨・網干領	10
備前備中・岡山領	115
周防国	230
長門国	158
伊予・越智島	9
対馬	36
壱岐国	74
筑前・福岡領	98
肥前・基津養父郡	43
豊後・熊本領	60
肥後・熊本領	182
日向・諸県郡	84
越後	21
阿波・淡路	124
総計	4100

付表２　史料群Ⅱ:『日本農書全集』の各書とその成立地・採録品種名数など

巻	書　名	著　者	成立年	場所	品種数
1	耕作噺	中村喜時	1776	津軽	23
1	奥民図彙	比良野貞彦	1781～1800	津軽	13
2	経邑耕作鈔	淵澤原右衛門	1847	陸中	3
2	地下掛諸品留書	三浦文右衛門	1862	会津	35
2	亀尾畴圃栄	庵原菌斎	1819	松前	6
3	菜園温古録	加藤寛斎	1866	常陸	21
4	耕稼春秋	土屋又三郎	1707	加賀	94
5	農事遺書	鹿野小四郎	1709	加賀	19
6	私家農家談	宮永正運	1789	越中	85
8	家業伝	木下清左衛門	1842	河内	3
9	農作自得集	森廣傳兵衛	1762	出雲	3
10	清良記	土居光也	1629～54	伊予	84
10	農術鑑正記	砂川野承	1716～35	阿波	8
11	野口家日記	野口正時	1847～65	肥前	8
17	百姓伝記		1681～83	三河	3
19	会津農書	佐瀬与次右衛門	1684	会津	46
20	会津歌農書	佐瀬与次右衛門	1704	会津	8
22	耕作仕様書	福島貞雄	1839～42	武蔵	25
23	農稼録	長尾重喬	1859	尾張	34
24	農具揃	大坪二市	1865	飛騨	12
25	北越新発田領農業年中業事		1830	越後	48
28	地方の聞書	大畑才蔵	1688～1703	紀伊	19
28	作もの仕様	久下金七郎	1837ころ	丹波	7
29	自家業事日記		1849	伯耆	3
30	耕耘録　細木庵常・奥田之昭		1834	土佐	35
31	農要録	宗田運平	1844	肥前	2
33	農業日用集（解題）		1717～1903	豊前	80
36	農業心得記	長崎七左衛門	1816	羽後	17
36	やせかまど	太刀川喜右衛門	1809	越後	12
37	農書全		1710ころ	岩代	36
37	伝七勸農記	柏木秀蘭	1839	岩代	6
39	耕作仕様考	五十嵐篤好	1837	越中	3
41	竹原東村田畠諸耕作仕様帖	彦作	1709	安芸	9
41	続物紛	岡本高長	1789	土佐	18
42	大福田畑種蒔仕様帳	小貫種右衛門	1827～28	下野	6
43	御百姓用家務日記帳			美濃	3
44	土屋家日記	土屋弥総太	1808	備後	7
61	豊秋農笑種	源八	1843	出雲	28
61	伊勢錦		1864	伊勢	44
70	羽陽秋北水土録　釈浄因		1787	羽後	46
		以上以外の品種名数			115
				総計	1077

注）付表Ⅰの鎖線以下の２史料は盛永ら編『享保・元文産物帳」に付されている参考資料

付表３　『地方書』『坪刈帳』などから採録した品種名数

史料名	作成者	対象年	場所	出　典	品種数
1）武田源左衛門検地秘書	佐藤彌六	1700前後	陸奥	小野武夫編『近世地方経済史料』巻４*	5
2）郷村牒		1702	陸奥	安田健『日本農業発達史』２	34
3）八戸弾正知行所産物有物改帳		1735	陸中	安田健『日本農業発達史』２	14
4）下伊沢大肝煎雑記		1764～80	陸中	安田健『日本農業発達史』２	39
5）　豊年瑞相談	佐藤家文書	1755	出羽	小野武夫編『近世地方経済史料』巻5*	10
6）星家所蔵種子帳・稲作帳	星家所蔵文書	1806～	越後	『アチック・ミューゼアム彙報』38	47
7）甲州中三郡の稲種		1705～35	甲州	佐藤常雄『近世稲種論と稲作生産力の展開』	68
8）南箕輪村誌	村誌編集委	1681～1719	信濃	南箕輪村村誌編修委員会（1985）*	44
9）大河原村 前島家日誌ほか		1758～92	信濃	古島敏雄『日本農業技術史』東大出版会	78
10）樹芸考	岸喜平治蔵	江戸期末	上野	小野武夫編『日本農民史料』巻４*	5
11）農譚藪	鹿峯田理 纂述	1722	伊勢	小野武夫編『近世地方経済史料』巻5*	34
12）三国地誌	藤堂元補	1763	伊賀	薦田伊人編『大日本地誌大系』*	2
13）田法記	岸崎佐久治	1682	出雲	小野武夫編『近世地方経済史料』巻６*	16
14）伝法記		1798	出雲	小野武夫編『近世地方経済史料』巻８*	4
15）両国本草	烏田智庵ら編	1737	長州周防	国立国会図書館図書*	218
16）西讃符志	秋山椎恭ら編	1858	讃岐	京極家編：那珂多度同志会*	32
17）田法雑話		1764～71	筑前	小野武夫編『近世地方経済史料』巻１*	5
18）佐賀県稲作坪刈の研究	早川孝太郎	1780～	肥前	農業総合研究所	74
19）雑事紛冗解	細川重賢編	1772～1788	肥後	花岡興輝編『雑事紛冗解』吸古書院	327
20）日向纂紀巻16～18	平部嶠南編	1741	日向	ジャパンサーチ*	2
21）成形図説	曾槃ら編	(801～04	薩摩	鹿児島大学デジタルコレクション	97
22）地方竹馬集	平岡道敬	1689		小野武夫編『近世地方経済史料』巻２*	15
23）続地方落穂集	武陽泰路	1762～		滝本誠一編『日本經濟叢書』巻９*	37
24）地方古伝				国立国会図書館図書*	11
品種名採録総数					1213

＊印：国立国会図書館のデジタルライブラリーを活用させていただいた。